

- 経年変化からみる考察 -

○倉重 加代* 西村 一朗** (*奈良女大・院 **奈良女大)

【目的】戸建住宅地におけるコミュニティ形成の空間的手段として、数戸に一つのCOMMONスペースを囲んだ形態の計画戸建地が開発された。開発から約15年が経過した現在、居住者側からの視点で、今一度検討する必要がある。本研究では居住者のCOMMONスペースの利用や満足度等を明らかにすると同時に、以前の調査結果と比較し、経年変化を明らかにすることにより、その定着度や将来性を検討することを目的とする。

【方法】居住者の利用や満足度等を明らかにするために、1997年11月、留置自記式アンケート調査を行った。(対象戸数484戸、有効回収票数358票、有効回収率74.0%)調査対象地は、計画戸建地である奈良県ガーデンハウス真美ヶ丘を選定し、経年変化を明らかにするために、1986年の調査結果資料をもとに比較検討した。

【結果】COMMONスペースは、様々な用途で利用されているものの、以前の調査結果と比較してみると、その利用は全体的に減少の傾向にある。また、COMMONスペースに対する居住者の様々な満足度評価も、全体として低下している傾向にあるが、満足度の内容によっては評価が上がっているものもある。COMMONスペースがあることによるトラブル意識に関しては増加しており、特に、一家あたりの自動車の保有台数が増えたことが要因と考えられる。「自動車の出し入れの音」や「無断駐車」といった自動車に関するトラブル意識の増加が顕著である。全体的に、利用の減少や満足度評価の低下、トラブル意識の増大、といった傾向にあるといえるが、そうでないものもあり、COMMONスペースの定着や将来性を考えると、途中の段階であるといえよう。今後、さらに検討を続ける必要がある。